



大妻多摩中学校

(サンプル問題)

二〇二〇(令和二)年度

入学試験問題(総合思考力型)

【読解表現(作文)】

時間 60分

2月1日(土)

【注意事項】

- 1 問題は3ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。
- 4 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 5 問題冊子の4～5ページは下書き用として活用してください。

問題は次のページからです。

◎次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

読書を必要ないとする意見の根拠^{こんきょ}として、読書をするよりも体験することが大事だという論がある。これは、根拠のない論だ。体験することは、読書することとまったく矛盾^{むひん}しない。本を読む習慣を持っている人間が多く、体験をすることは、まったく難しくはない。むしろいろいろな体験をする動機づけを読書から得ることがある。

たとえば、藤原新也の『アジア（注1）放浪の本（『印度放浪』朝日新聞社など）』を読んで、アジアを旅したくなる若者がいる。本に誘われて旅をするというのはよくあることだ。あるいは考古学の本を読み、実際に遺跡掘りの手伝いに行く者もある。読書がきっかけとなって体験する世界は広がってくる。

それ以上に重要なことは、読書を通じて、自分の体験の意味が確認されるということだ。本を読んでいて「自分と同じ考えの人がここにもいた」という気持ちを味わうことは多い。まったく生まれも育ちも違うのに、同じ考えを持っている人に出会うと、自分の考えが肯定^{こうてい}される気がする。自分でぼんやりとしかわからなかった自分の体験の意味が、読書によってはっきりとすることがある。「あれはこ

ういう意味だったのか」と腑^ぶに落ちることが、私は読書を通じてたくさんあった。

暗黙知^{あんもくち}という言葉がある。自分ではなかなか意識化できないが、意識下や身体ではわかっているという種類の知だ。言語化しにくいけれども何となくからだでわかっているような事柄は、私たちの生活には数多い。むしろそうした暗黙知や身体知が、氷山^{ひょうざん}でいうと水面の下に巨大にあり、その氷山の一角^{いっかく}が明確に言語化されて表面に出ている、という方がリアルティに即^{そく}しているだろう。本を読むことで、この暗黙知や身体知の世界が、はっきりと浮かび上がってくる。自分では言葉にして表現しにくかった事柄が、優れた著者の言葉によってはっきりと言語化される。こうした文章を読むと共感を覚え、線を引きたくなる。

「自分ひとりの経験ではなかったのだ」という思いが、自分の生を勇気づける。自分をつくっていくためには、現在の自己を否定して、より高次の自分へと進んでいくことももちろん必要だが、私の実感では、自分を肯定してくれる者に出会うことによって、すっきりと次に進むことができるように思う。体験すること自体が重要なのではなく、その体験の意味をしっかりと自分自身でつかまえ、その経験を次に生かしていくことが重要なのだ。体験の意味を深

め、経験としていく。その積み重ねに、本は役立つ。優れた著者が自分と同じ経験や意見を述べてくれていると、安心して自分を肯定できる。自分に都合のいい著者ばかりを選んで読むというのは、狭い読書の仕方のように思われるかもしれないが、読書を始めた頃はとくに、共感を持つて読める本の方が加速する。

読んでいると「そうそう、自分も実はそう考えていた」と思うことがよくあるが、多くの場合、そこまで明確に考えていたわけではない。言われてみると、それまで自分も同じことを考えていたと感ずるといふことだ。しかし、この錯覚は問題ない。あたかも自分が書いた文章のように他の人の書いたものを読むことができるというのは、幸福なことだ。

なぜこの著者はこんなにも自分と同じような感覚を持っているのだろうか、あるいは、まさにこれは自分が書いたものようだと感じることさえ、私の場合あった。

自分の経験と著者の経験、自分の脳と著者の脳とが混じり合ってしまう感覚。

これが、読書の(注2)醍醐味だ。これは自分を見失うということではない。一度自分と他者との間に本質的な事柄を共有するというのが、(注3)アイデンティティ形成の重要な

ポイントだ。自分ひとりに閉じて内部で循環するだけでは、アイデンティティは形成されない。他者と本質的な部分を共有しつつ、自己の一貫性をもつ。これがアイデンティティ形成のコツだ。

読書は、自分の経験を確認しやすい行為だ。すでに言葉として紙の上に定着している言葉は、生まれては消えていく体験に形を与える。「自分に引きつけて読む」という読み方は、客観的とは言えないが、読書のある時期には必要なことでもある。自分の生き方を肯定してくれるような著者を探し、自分自身を勇気づけていくことは、自己形成のプロセスとして有効だ。危険なのは、それが一人に限定して狭くなってしまふ場合などである。何人もの著者を自分の経験を確認させてくれる人として持つことができれば、狭い思い込みも徐々に広げられていく。ある程度わかっているつもりのことでも、はっきりと文字にして表現されることで、確認をすることができる。認識を定着させていく上で、読書による経験の確認は、意外に大きな意味を持っている。

(齋藤孝『読書力』(岩波書店)より)

注 1 放浪

あてもなく、さまよい歩くこと。

2 醍醐味

物事の本当の面白さ。

3 アイデンティティ

自己が環境や時間の変化

にかかわらず、連続する同一のもの

であること。自己同一性。自己証明。

問 1

「自分に都合のいい著者ばかりを選んで読む」という行為には、良い面もあると筆者は言っていますが、それはどういうことですか。三十字以上四十字以内で書きなさい。

問 2

「自分の脳と著者の脳とが混じり合って」いても、「自分を見失」わないということとは、どういう状況になっていることを言っているのですか。三十字以上四十字以内で書きなさい。

問 3

「読書」という題名で、自分の体験を例に挙げながら、あなたが成長したことを、本文の内容も参考にして四百字程度でまとめなさい。

《解答する上での注意》

- ・ 縦書きたてがで書くこと。
- ・ 書き出しと段落の最初は、一マス空けること。
- ・ 段落をかえたときの残りのマス目は字数として数える。ただし、問1・問2は、一マス目から書き、段落をかえないこと。
- ・ 句読点や「」（ ）なども原則として一マス使うこと。ただし、行の先頭にきてしまう場合は、前の行の最後のマスに付け加えること。
- ・ 文末の表現は「です・ます」でも「だ・である」でもよいが、文体は統一して用いること。

